

『自我のめばえ』

津守 真著

岩波書店刊

この本は、ある一人の女の子の二歳の時のことをもとにして書かれている。第一章は、ある一日の生活について、第二章は、二歳から三歳までの一年間に起こったことについて、そして第三章は、それらの事実の中から、この時期に起こっている自我の形成についての理論である。このような構成をみると非常にスッキリした本のように思えるが、実はなかなか難しい本である。二歳児の一日がどうして難しいのかと言われそうであるが、まず冒頭の一文を紹介しよう。

友定啓子



幼い子どもが目を開いて、自分の周囲の世界に気がついたとき、そこにはすでに物があり、人がいる。子どもは、心ゆくまで、さわったり見たり動かしたりするうちに、次第にその物の性質や可能性を発見してゆく。それと共に、子どもは、自分ができることと、できないことを確認し、自分が何をしたいか、心の奥底で何

を望んでいるかを知ってゆく。それは、自分の活動を十分に追求することによってなされる。

子ども自身が生み出す活動を、大人が承認し、共に参加し、喜び合うときに、それは相互の世界の現実となる。こうして子どもは、生れたときから、世界の中に生き、世界の理解を深めつつ、自己実現をし、活動を生み、現実をつくってゆく。

特に難しい用語もなく、読み過ごしてしまいそうなこの文章の中に、この書物における著者の思想の殆どが含まれている。子どもにとって世界とは何か、どのようにして世界と出会い、自分をつくっていくか、そのときの大人の役割、また自己実現によって世界を再構成していくことなどである。人間の内側に入りこまなければ理解しにくい文章である。

さて、この書物全体の印象を言えば、非常に魅力的だがわかりにくい、そしてわかりにくさを超える

と、「重い本」だと言うことになる。平易な語り口で展開されているのかかわらず、わかりにくい。

それは一体何に起因するのだろうか。まず、対象としてとりあげられた二―三歳の子どもの世界そのもののわかりにくさがある。乳児期の目ざましい発達と、おだやかさを通りこして、それにかわって、意味のとりにくい自己主張、しかも大人の都合などおこまいなしに泣きわめき、怒り、ガンコになったり、憶病になったり、こちらも我を忘れてふり回されるそんな二歳の子どもの世界をそのままとりあげていること。二つ目には、幼稚園や保育園のような特別の場でなく家庭を舞台にしていること。日常のゴタゴタした、とるに足らないことのように見えるものの連続の中の保育であるということ。三つ目には、この中に登場する保育者が、明瞭な保育観を語らないこと。そして最後に、一つ一つの場面考察に特定の理論を用いないことである。これらを持ちこたえつつ読み進む人はこれらが、逆に本書の大きな

魅力になっていることと、その価値に気付かれることと思う。

二歳の子どもと一日つき合うと、肉体的にのみならず、精神的に疲れてしまうそんな二歳児なのだが、実は「ひとりの人間として自我の力がつくられる時期」であり、乳児時代の守られた存在から、はじめて外界と出会い、混乱し、とまどい、挑戦し、その中で希望や理想と出会い、それをさらに外界と統合させてゆく栄光と苦悩に満ちた日々なのだ、ということを示してくれる。それは、一日という単位の中でも、自己を実現し、自分に納得し満足する時間、混乱と不安におののく時間があり、一年という長い経過の中で見ると、より一層はつきり示されてくる。その生活の中で子どもはじめて自分自身の中心をさぐりあてていくのである。二歳の子どもの物のとりあいの際に示される激しい感情は、自我の喪失の危機を表わしているのだし、それらの危機を大人の助力で乗りこえ、長い混乱の中から、あこが

れの少女を見出し共に過ごす日々、あるいはクリスマスツリーの輝きに未来を望み見る日々、そしてその後の長い苦闘を経て、自己の統合に至る二歳から三歳への世界、しかもそれが描画に表現されるということ、今さらのように子どもの内面世界の豊かに目を見張らざるを得ない。このように示されると、突然に人格が現われてくるようにみえる三歳に至るまでの、二歳児に私達はもっとやさしくなれるような気がする。

本書のもう一つの大きな魅力は、このような幼児の内面生活を支える保育そのものにある。本書の中で保育者は、著者であり、夫人であり、年長の兄弟だったりする。朝、目覚めて出遅れたことに気付き不安定になった子どもに、「気持ちよく一日を出発させるように」「後からくる者が入りやすいように」と気を使う。避けられないきょうだいの葛藤、対立の中で共存のすべをさぐり、子どもたちがそれぞれ自己実現できるようにということをとめてつき

あう。子どもの自発性が発動するまでは、子どもの訴えや悩みに大人はよく耳を傾け、一たび発動したならば干渉はしない。一日一日、子どもの充実した生活をつくり上げてゆくという保育である。このように記してしまえば、定まっているような印象を受けるが、実際には一瞬一瞬動いていて、子ども達の傍におりながら、矛盾に満ちた子どもの世界をまるごと引き受け、その中で、個々の子どもの自己充実を援助しつつ、その場をつくる人となる。そこにあるのは一貫した存在肯定とありうる限りの子どもへの共感ということである。

倉橋惣三は、「幼児の生活それ自身の自己充実に信頼して、それをできるだけ発揮させて行く」ことに保育法の第一段がある、と述べているが、まさにそれに徹しているとも言えよう。

この保育が幼児の人格形成とどのようにつながって行くかが、本書の第三章において展開されている。このように他者（大人）の援助を受けながら自

己活動を展開し、自らの心の願いを實現していく。

子どもは自己實現による充実した活動ができるようになる、そこから他者への関心が生じ、それが内なる（自己）抑制力として働く。ひとたび、他者の存在に深い関心をもった人間は、他人を無視してわがままを通すことはできなくなる。他人の感情や考えに對して敏感になる。そして他人をよるこぼせ、他人の期待にそうように振舞おうとする。……自分が他者に吸収されるのではなく、また自己に「ごうのよいように他を同化する」のではなく、真に他者に出会うのは、自己實現の過程における、自己の追求の努力においてである。幼児期に、幼児の自己實現の生活がなかったならば、その後の自己の探求もまた危うくされる。……このように第三章において、自我論と保育論がぎり離せない形で、その後の児童期・青年期・成人期へとひきつがれている。このあたりになると、保育学というよりは人間学、あるいは哲学書の様相を帯びてくる。

本書において、どうしても問題にしておかねばならないことが一つだけ残っている。すなわち、第三章に至る第一、第二章における著者の考察方法である。例えば、二歳の子どもがきょうだいより遅れてめざめた。出遅れたと感して泣きそうになる、という記述がある。なるほど、幼児にとっては朝起きた順番が、その日一日を左右するほどの重大事だったのか。しかし、こんな事例は、つまり寝起きの悪い子の話は今に始まったことではない。だけれども、誰もそれを「出遅れたという挫折感」で説明しなかった。そうすると、なぜ著者だけがこれに気付いたか、ということになる。なぜ我々凡人は同じ事実を毎朝見ていながらそれに気付かないのか。著者曰く「どのような考えや先入観にもとらわれないで、いま起ることに對して素直な感受性をもって心を開いて生きる」と。しかし、著者は同時に、こんなに素朴に見える考察について、こう述べている。「あらかじめ定めたひとつの視点からでなく、多様な現象

に即して多面的に考察を試た」あるいは「子どもの活動や行為をできるだけありのまま見て考えてゆきたい」と。すなわち保育としてはきげんの悪い子どももの感情に素直に共感して共に生きて行くことができる。ただ、その意味については、あれこれの多面的考察の後、結局、目の前にある素朴な事実を見つめることになった、ということになるのだろうか。つまり、そのことをことさらに言わねばならぬ程に、我々大人は小さな子どもの行動の素朴な意味をはかりかね、共感できない状況にあるということだろうか。

かなり、かたい紹介になってしまったが、最後に一言、小さな子どもと共にある方は、この本を読みながら、ずいぶん寄り道ができると思う。「特殊な子どもの特殊な一日」を読みながら、こんなにも共鳴してよく似た事実が次々と出てくるものか、と驚いてしまう。そして自らの保育を問われつつ、希望をも与えてくれる書物である。

(山口大学)